

蘇格蘭(スコットランド)の風景



堀地 紀行
HORICHI Noriyuki

国土館大学工学部教授

■スコットランド

メル・ギブソン主演のブレイブハートをご覧になった方もおられると思います。ストーリーは13世紀末から14世紀にかけてスコットランドに2人の英雄、民衆出身のウィリアム・ウォレスと、旧王族のロバート・ザ・ブルースが出現し、2人がエディンバラとグラスゴーの中間点、ここは双方から湾が深く入り込んだ狭隘の地で、軍団の通過が唯一可能な土地スターリングで、イングランドを2度撃破し、失ったスコットランドの主権を奪い返すという物語で、映像にはスコットランドの自然がふんだんに取り入れられています。

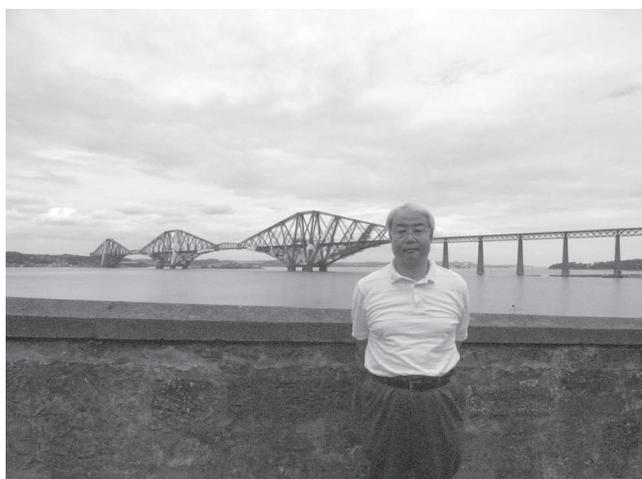
この映画の中で自然の雄大な景観を見てから、是非一度スコットランドへと考えていました。

我々日本人にウイスキーやゴルフなど大人の楽しみを授けてくれたスコットランドの私の旅はエディンバラからスタートし、グラスゴー、古戦場のスターリング、ルモンド湖、グレン・コー、ネス湖、インバネス（インバは河口を意味し、ネス川の河口の町の意味）と5日の行程で回りました。スコットランドの北部はハイランドと言っていますが、この地域は氷蝕

を受け、深い入り江と湖（Loch：ロッコという）と、侵食の進んだU字谷（Glen：グレンという）が特徴的で、幻想的で雄大な自然が楽しめます。また、ロッコのほわりには古城が往時を偲ばせ、夏は紫のラベンダーやアザミなどの花々が彩りを添えます。ところで、イギリス国旗は、イングランドのセントジョージ・クロス、アイルランドのセントパトリック・クロス、スコットランドのセントアンドリュース・クロスが組み合わせられたもので、ユニオンジャックと呼ばれていることは有名ですが、それぐらい各地域の独立色が強いと言うことでしょうか。ちなみに、ジャックとは、船首につけた旗をさすそうです。

また、ウエールズは16世紀にイングランドに併合されたので、国旗に面影は残されてはいませんが、独自性は強いとのこと。話を戻すとスコットランドの旅では、何と言っても、景色が大変素晴らしいのですが、また地域の個性でもある言葉がかなりロンドンあたりと異なるのも面白く感じました。先ほどの、湖のロッコもchの発音はドイツ語読みです。

言葉の雑学で恐縮ですが、スコットランドでは教



創建以来120年近い歴史を有すフォース鉄道橋（エディンバラ近郊）



大きな峡谷：グレン・コーと子羊たち

会は、カークで (kirk) とつづります。ドイツ語はキルヒイ (kirch) です。英語はchurchですから、kとch, irとurを注視するとなにやら、言葉の地域変化が読み取れそうです。

また、グレン・フィディク (Glen Fiddich; 鹿の谷の意味)は鹿の絵柄の三角瓶のスコッチ・ウイスキーで、よく日本へのお土産にも使われますが、スコットランドではフィディヒとやはりchはドイツ語読みです。

この人たちは、ローマ人の侵攻にも屈せず、結局、侵入を諦めさせて、ニューカッスの南に今も残るハドリアヌスの長城をローマ人に築かせ、退却させた勇猛な原住のピクト族に、アイルランドから渡ったスコット族のケルト人や北部の島づたいに北欧ノルウェーから加わったバイキングが起源で、イングランドとは異なった文化と言葉をもち続けています。

現在のスコットランドは北海油田の恩恵を受け、ガス料金などは圧倒的に安く、また豊かなようですし、独自の政府を樹立していて、予算修正権を持ち、通貨も独自で明らかにイギリスの中の外国という感じがします。

話は少し飛びますが、イギリスの産業革命は、スコットランドが発祥の地であり、グラスゴーがその源で、さらに言えば1451年創立のグラスゴー大学の産業革命であった、と説明してくださったのは、私の在外期間中に、代理の講師をお願いした、三浦基弘先生で、『日本土木史総合年表』の著者でもあります。グラスゴー大学からは、1774年、動力源の蒸気機関を発明し、製品化したジェームス・ワットが輩出し、そして経済学では、富の実態を重商主義のような貨幣にみるのではなく、労働こそが価値の源と考え、「価値は、労働に利潤と地価を加えたもの」と1776年の『富

国論』で説いたのアダム・スミスが教鞭をとり、産業革命の「動力」と「哲学」の両輪を与えたと語っておられます。

まったく頷ける説明で、これら二つの動輪なくしては、世界の工場と讃えられた当時のイギリスの繁栄はなかったと思われます。

また、グラスゴー大学からは、土木工学では馴染みの深い、土圧論のランキンが教鞭をとっていました。伊藤博文はランキンに要請し、ランキンは教え子のヘンリー・ダイアーを工部大学校（東京大学工学部の前身）の校長に派遣して、わが国の黎明期の産業の礎となった人材の育成が始まったとのこと。

なにやら、かつて卒業式で歌われた蛍の光もスコットランド民謡であったことを思い出すと、日本人、とりわけ工学を学んできた我々にとっては、イギリス、そしてスコットランドは、工学の発祥の地としてあらためて感謝の気持ちを抱かせる、そんな感慨深い旅となりました。



ウォレス (左) とブルース (右) 2人のスコットランドの英雄が守るエディンバラ城の大手門 (城門)



ハイランドの祭 バグパイプの行進 (フォート・ウィリアム)



古城からネス湖を望む